町民文芸

只見短歌会

五月詠草

大塚栄一　指導

趣のある小さき草さへ刈られるて機械の音の遠ざかりゆく　皆川　恒子

病院を出でて若葉の輝けば車呼ばずに昂り歩む　古川　英子

五代目を継ぐ孫の嫁伴ひて家族と里の身内巡るも　吉津　政枝

施設より戻れば妹は俎板や大根前に置き千切り頼む　五十嵐英子

はや五月も終ると言ふに肌寒く蒔きし種みな芽を出す遅し　馬場　八智

長き髪せし若者の喋らねば男女の区別つかず戸惑ふ　五十嵐夏美

柄の緩む鍬を浸して置く堀の水位上りて勢ひの増す　目黒　富子

種蒔きの準備せし朝雪降りて三十センチも積もり驚く　渡部ゆき子

予報はづれ晴れし日和を喜びて孫はカラフルな自転車をこぐ　齊藤ちひろ

声かけて草花に水をやりながら今日一日の晴れるを祈る　渡部ヨリ子

娘と孫の花の仕入れに付きゆくと九十余の夫四時に仕度す　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会

六月例会

目黒十一　指導

訪ね来しダムの茶房やほととぎす　邦夫

父の日が九十六歳誕生日　笑羊

雨の日の大瑠璃の声昆布巻く　修一

母の日の仕事着の身をよろこびて　康女

薯の芽のうす紫の息づかい　一灯

捨て置きし鉢に草の芽出でにけり　都

点滴の眼は空見つむ田植時　リウコ

軒つばめハイハイ上手囀されて　夏鴨の番い飛びくる背戸の池　大雨の去るや一望山青葉　一穂

九十歳越して田植の心配す　薄衣ゆるやかに着て米寿かな　洋子

トラクター止めて遅咲き桜見る　ぶなの木の青葉透して光降る　敦子

郭公の声いつまでも夕暮るる　満開の桜や遠く飯豊山

只見湖を仕切る浮標や鴨涼し　礼

山に入る夫に新茶を点てる朝　修一

糸桜ゆっくり吹かれている社　春昼や海猫を聞く遊覧船　一灯

午後からは膝に肘付く田植かな　阿吽の像力む素足や風薫る　邦男

ばば様の背の人形藤薫る　サイレンの音を遠くに田植かな　恒夫

楚々としてかくも高きに桐の花　只見川桐の花咲く曽野綾子　吉児

神木を抱く学童風薫る　五十鈴川の音なく流れ錦鯉　隆堂

古民家の軒に晒して青山椒　SLの汽笛縫いゆく桐の花